

喜びの帰宅

加藤 享

[聖書]マルコによる福音書5章1～20節

一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわなideくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

[序] 嵐を静めた主

先週、丸山主事が担当された説教の箇所は、ガリラヤ湖を横切って向こう岸に渡ろうとした主イエスと弟子たちを乗せた舟が、**激しい突風**に襲われて、**沈みかけた出来事**でした。ペテロを始め幾人もの弟子たちは、このガリラヤ湖で漁師をして来たベテランです。その彼らでも「先生、わたしたちが溺れてもかまわないのですか」と寝ている主を起こして、助けを求めるほどの**危機**に立ち至ったのです。舟の艫(とも、船尾)で眠って居られた主は、起き上がると、風を叱り、湖に「**黙れ、静まれ**」と言われました。すると風はやみ、湖はすっかり凪になりました。

舟が沈む時は、艫(船尾)から沈んでいくそうです。主イエスは眠って居られる時にも、その**船尾に身を横たえて**、弟子たちを守って居られたのです。そして、いざという時には、弟子たちを滅ぼそうとする激しい風に向かって、「黙れ、静まれ」と叱りつけて、救って下さいました。丸山主事は、「**死よりも強いお方を信じるのが私たちの信仰だ**」と説教を結び、「主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらじ」と、皆で讚美歌を歌いました。

[1] 墓場の狂人を癒された主イエス

さて今日はその出来事の続きです。舟がガリラヤ湖の向こう岸、ゲラサ人の地方に着きました。そるとすぐ

に、汚れた霊に取りつかれた人が、墓場からやって来たのです。彼は、昼も夜も墓場や山で、叫んだり、石で自分の体を打ち叩いていました。そんな事をしていたら、程なく死んでしまうでしょう。村人たちは足枷や鎖で彼を縛ってみましたが、すぐに引きちぎってしまいます。どうすることも出来ずにいました。

その彼が、舟から上陸された主イエスをいち早く見つけて、走り寄って平伏し、大声で叫びました。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい」。主イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからです。「名は何というのか」「名はレギオン。大勢だから」。レギオンとはその地方を支配していたローマ軍の一個師団をさします。5～6000人の兵士からなっています。それほど多数の汚れた霊に取りつかれていたのですね。この人が支離滅裂な狂った行動を起こすのも、当然でした。

この悪霊どもは、神の子イエスが近づいて来られたので、自分たちの方から、主を追い払おうとしたのです。そして、自分たちをこの地方から追いつけないようにと、イエスにしきりに願いました。

ところで、その辺りの山で飼育されている豚の大群が、えさをあさっていました。それに目をとめた汚れた霊どもは、主イエスに、「どうしても移れというなら、豚の中に乗り移らせてくれ」と願いました。主がお許しになりました。汚れた霊どもは、ただちに彼から出て行き、豚の中に入り込みました。すると、どうでしょう。二千匹ほどの豚の群れが、突然狂い出して、崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んでしまったのです。汚れた霊どもも愚かですね。豚もろとも、自分たちも、ガリラヤ湖に沈んで、身を滅ぼしてしまいました。豚飼いたちは、この凄まじい突然の出来事に、胆をつぶして逃げ出し、町や村に知らせました。

何事が起ったのかと集まって来た人々は、あの狂人が、服を着て、イエスの傍らに静かに座しているのを見て、恐ろしくなりました。そして、主イエスにその地方から出て行ってもらいたと言いつけたのでした。そこで主イエスが舟に乗り立ち去ろうとされると、正氣に戻った人が、主と一緒にいきたいと願いつけました。しかし主はお許しになりませんでした。

「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことを、ことごとく知らせなさい」。そこで彼は自分の家に戻って行き、主イエスが自分にしてくださったことを、デカポリス地方に言い広めたのでした。

[2] 主の救いの御業の素晴らしさ

両親と3人の子どもの家族がありました。ところが二番目の子がいじめにあい、学校に行けなくなりました。精神状態も異常になり、万引きしたり、小さな子をいじめたりしているうちに、家出してヤクザまがいのグループに入り、遂に警察に逮捕され、少年院入りする身になりました。そのために、姉も弟も傷つき、夫婦仲も悪くなり、暗い家庭に転落してしまいました。本当にお気の毒でした。

私は、今日の聖書の記事に登場する大声で叫びながら、石で自分の体を打ち叩き、墓場で暮す男の姿を読んで、身近なその家庭の悲しみや苦しみが、浮かんできました。悪霊など本当に存在するのか、と言う人が居ます。しかし5人家族の一人が、いじめにあうということから崩れ出して、その家庭を破壊してしまうという現象、これは人間を異常な姿に変えていく悪霊の仕業の恐ろしさではないでしょうか。そしてこの悪霊

の仕業は、今日でも、至るところで発生しているのではないのでしょうか。

でも悪霊はイエス・キリストを恐れます。「俺とお前と何のかかわりがあるというのか。放っておいてくれ」と叫びました。しかし主イエスは悪霊が取り付いている男の前に立ち続けます。悪霊は仕方なしに、居場所を変えることにしました。それが身近に居た豚の群れ。主は「宜しい」と許可します。そして、突如豚を狂わせて、ガリラヤ湖になだれを打って飛び込ませ、悪霊どもを退治してしまわれたのでした。一方、悪霊から解放された男は、正気に戻り、服を着て、主のそばに静かに座りました。

人々はこの出来事に驚き恐れて、イエスに退去するよう求めました。癒された彼は、主のお傍に付いて行こうとしました。そうです。さんざん心配と迷惑をかけ続けた家族、近隣の人たちです。簡単に彼を受け入れてくれるはずがありません。でも主は「自分の家に帰り、身内の者に恵みの証をしなさい」とお命じになりました。主は彼の家族や近隣の人々をも救おうとされたのです。

主は、墓場でしか暮らせなかったこの男の救いばかりでなく、悪霊を退治すること、そして彼の家族たちの苦しみをも救うことを、しっかりと見据えて居られたのですね。主イエスの救いの御心の、何と大きく、深く、豊かなことでしょうか！その素晴らしさに感動しませんか？

[結] キリストを拒否する心

それにしても、この救い主イエス・キリストを、ゲラサの人々は、出て行ってもらいたいと言って、ガリラヤ湖の向こう岸に、追い返してしまっていたのでした。これは一体どういうことなのでしょう？

豚2000匹の損害、確かに貧しい人たちにとっては、大きな損害だったことでしょう。でも豚は汚れた動物で、ユダヤ人は決して食べませんでした(イザヤ書65:4, 66:17)。豚を飼うこともしません。ですからゲラサ地方は異邦人の居住地だったのでしょう。そこで、ユダヤ人イエスへの反発もあったかもしれません。

しかし、墓場を住み家として、山や墓場で夜昼かまわずに大声を叫んだり、石で自分の体を打ちたたいたりしている男が癒され、正気に戻ったのです。共同体全体の平安が回復したのです。何と嬉しいことでしょうか。豚の損害など、比べ物にならない大きな喜びのはずです。

しかしその祝福をもたらしたイエスの力に対する恐れが先立って、イエスを受け入れずにはじき出そうとする心。これは、よくよく考えて見ますと、私たち誰もが持っている心ではないのでしょうか。神が良くお考えになって、私に与えて下さる恵みを、拒否してしまう心です。

その端的な現れが十字架です。ユダヤ教の熱心な信仰者たちは、主イエスを恐れ憎んで、十字架にはり付けてしまいました。しかし主は「父よ、彼らをお赦し下さい」と祈りつつ、その罪を我が身に引き受けて、死んで下さいました。

私たちは自分の心にあるこの罪深さを自覚しつつ、主イエスの救いの御業を繰り返し読み、学び、心に留めて、救い主への信仰を深め、救い主を通してお与え下さる神の深い恵みと導きを、感謝して受けとめつつ、毎日を生きて行かなければならないと思います。

今日は2月の第一主日です。この後で**主の晩餐式**を守ります。「**わたしの記念**としてこのように行いなさい」との御言葉に従って、**パンと杯**を頂きます。そして十字架について死んで下さったキリストを救い主とする**信仰を新**にして、1ヶ月の歩みを進めて行きます。

主は、墓場でしか暮らせなかった男の救いばかりでなく、地域の平安、悪霊の退治、そして彼の家族たちの苦しみをも救うことを見据えて、ガリラヤ湖を渡り、ゲラサの地に行かれたのでした。**先の先まで見通す主イエスの救いの御心の、**何と大きく、深く、豊かなことでしょうか！「主よ、あなたのように**与える愛**を増し加えて下さい」と祈りつつ、日々の歩みを進めて参りましょう。

祈ります:主よ、悪霊の働きの恐ろしさをお示し下さって感謝します。あなたにしっかり結びついて、日々を生きる者にしてください。主よ、私と共に居て、苦しむ友、悲しむ友、迷いの中でうずくまっている友に、少しでも寄り添って生きる者にして下さい。主よ、殺し合う争いを止めて下さい。平和をお与えください。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン